

森
鷗
外

空
車



空

車

むなぐるまは古言である。これを聞けば昔の絵巻にあるような物見車が思い浮かべられる。

総て古言はその行われた時と所との色を帯びている。これを其儘に取って用いるときは、誰も其間に異議を挟むことは出来ない。しかしそうばかりしていると、其詞の用いられる範囲が狭められる。此範囲はアルシヤイスムの領分を限る線に由って定められる。そして其詞は擬古文の中にしか用いられぬことになる。

これは窮屈である。更に一步を進めて考えて見ると、此窮屈は一層甚だしくなつて来る。何故であるか。今むなぐるまと云う詞を擬古文に用いるには異議が無いものとする。ところで擬古文でさえあるなら、文の内容が何であろうと、古言を用いて好いかと云うに、必ずしもそうで無い。文体にふさわしくない内容もある。都の手振だとか北里十二時だとか云うものは、読む人が文と事との間に調和を闕かいでいるのを感じずにはいない。

此調和は読む人の受用を傷つける。それは時と所との色を帯びている古言が濫用せられたからである。

しかし此に言う所は文と事との不調和である。文自体に於ては猶調和を保つことが努められている。これに反して仮りに古言を引き離して今体文に用いたらどうであろう。極端な例を言えば、これを口語体の文に用いたらどうであろう。

文章を愛好する人は之を見て、必ずや憤慨するであろう。口語体の文は文にあらずと云う人は姑く置く。これを文として視ることを容ゆるす人でも、古言を其中に用いたのを見たら、希世の宝が粗暴な手によって毀たれたのを惜んで、作者を陋ろうとせずにはいぬであろう。

以上は保守の見解である。わたくしはこれを首肯する。そして不用意に古言を用いることを嫌う。

しかしわたくしは保守の見解にのみ安住している窮屈に堪えない。そこで今体文を作っているうちに、ふと古言を用いる。口語体の文に於ても亦恬としてこれを用いる。着意して敢て用いるのである。

そして自分で自分にいいわけ分疏ぶんすをする。それはこうである。古言は宝である。しかしじゆうしゆう什襲じゆうしゆうしてこれを蔵して置くのは、宝の持ちぐさである。縦い尊重して用いずに置くにしても、用いざれば死物である。わたくしは宝を掘り

出して活かしてこれを用いる。わたくしは古言に新たな性命を与える。古言の帯びている固有の色は、これのために滅びよう。しかしこれは新たなる性命に犠牲を供するのである。わたくしはこんな分疏をして、人の諂そしりを顧みない。

わたくしの意中に言わんと欲する一事があつた。わたくしは紙を展べて漫然空車と題した。題し畢つて何と読もうかと思つた。音読すれば耳に聴いて何事とも弁え難い。然らばからぐるまと訓もうか。これはいかにも懐か

しくない詞である。その上軽そうに感ぜられる。瘠せた男が躁急に挽いて行きそうに感ぜられる。此感じはわたくしの意中の車と合致し難い。そこでわたくしはむなぐるまと訓むことにした。わたくしは着意して此古言の帯びている時と所との色を奪って、新なる語としてこれを用いるのである。そして彼の懐かしくない、軽そうに感ぜさせるからぐるまの語を忌避するのである。

空車はわたくしの往々街上に於て見る所のものである。此車には定めて名があるう。しかしわたくしは不敏にしてこれを知らない。わたくしの説明に由って、指す

所の何の車たるを解した人が、もし其名を知っていたなら、幸いに誨^{おし}えて貰いたい。

わたくしの意中の車は大いなる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云うものに似ている。只大きさがこれに数倍している。大八車は人が挽くのに此車は馬が挽く。

此車だつていつも空虚でないことは、言を須^またない。わたくしは白山の通で、此車が洋紙を梱^{こん}載して王子から来るのに逢うことがある。しかしそう云う時には此車はわたくしの目にとまらない。

わたくしは此車が空車として行くに逢う毎に、目迎えてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いである馬は骨格が逞しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたように、緩やかに行く。馬の口を取っている男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の霊でもあるように、大股に行く。此男は左顧右眄することをなさない。物に遇って一步を緩くすることもなさず、一步を急にすることをもなさない。旁若無人

と云う語は此男のために作られたかと疑われる。

この車に逢えば、徒歩の人も避ける。騎馬の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍をなした士卒も避ける。送葬の行列も避ける。此車の軌道を横るに会えば、電車の車掌と雖も、車を駐めて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。

そして此車は一の空車に過ぎぬのである。

わたくしは此空車の行くに逢う毎に、目迎えてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどとは、かけても思わない。わたくし

が此空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようなどと思わぬことも亦言を須たない。縦いその或物がいかに貴き物であるにもせよ。

(一九一六年五月 『東京日日新聞』)

日本文学電子図書館

空 車

著 者：森 鷗外

制作者：宮澤一郎

底 本：「世界文芸論集」、
世界教養全集 別巻2
平凡社

1968年3月31日 7版発行



日本文学電子図書館